

「令和7年度埼玉県障害者芸術文化活動普及支援事業」報告書

みんなでつくる

SAITAMA
STYLE

埼玉

スタイル



方式



2025-2026

埼玉県障害者芸術文化活動
支援センター

アートセンター集

art center syu 2025 report

社会福祉法人 みぬま福祉会
Minuma Fukushikai

厚生労働省

障害者芸術文化活動普及支援事業とは

障害のある人が芸術文化にふれ、楽しみ、
深めることができる社会づくりを推進する中間支援事業です。

各都道府県に「障害者芸術文化活動支援センター」(略称:支援センター)の設置を推進して、地域における支援体制を全国へ展開しています。

◎都道府県レベル

支援センター

地域内の相談支援、人材育成、発表機会の創出、ネットワークづくり、情報発信など

○ブロックレベル

広域センター

エリア内の支援センターへの支援、地方自治体の基本計画策定支援、ブロック研修など

○全国レベル

連携事務局

全国の情報収集・発信、ネットワーク体制の構築など
<https://arts.mhlw.go.jp>

支援センターでは、各地の自治体や社会福祉法人、NPO法人などが実施団体となり、地域に応じた計画を立てて事業を実施。関係機関や広域センター、連携事務局とも連携し、多様な人々が地域で自分らしく生きることができる社会を目指して障害のある人たちの芸術文化活動の普及に努めています。



「令和7年度埼玉県障害者芸術文化活動普及支援事業」報告書

art center syu 2025 report

みんなでつくる 埼玉方式 スタイル

もくじ

障害者芸術文化活動普及支援事業とは	P01
埼玉県障害者芸術文化活動支援センター アートセンター集について	P04
実施団体 みぬま福祉会 工房集とは	P05
官民連携でネットワークを育む 埼玉独自の普及支援事業のあゆみ	P06
埼玉県障害者アートネットワーク TAMAP±〇について	P07
■企画展に向けて	P09
みんなでつくる展覧会のポイント	P10
■選考会	P11
□埼玉県障害者アート企画展	P13
関連イベント	P15
■権利保護研修	P19
■グッズ研修	P20
□織り&グッズ展	P21
□ダンスワークショップ	P23
□音楽研修企画	P24
相談窓口	P25
情報発信	P26
地域での連携事業	P27
埼玉県障害者芸術文化情報	P29

本書では、2025年度の活動を1冊にまとめています。本事業の実施にあたり、ご協力いただいた皆様に心より感謝申し上げます。

2026年3月

埼玉県障害者芸術文化活動支援センター

アートセンター集について

活動理念 芸術文化を通して人と人がつながり、
どんな障害のある人でも、豊かな人生を過ごせる社会を目指しています。



表現することは、
生きることそのもの。
アートセンター集は、
表現活動を通して、
人と人とを豊かに
つないでいきます。

アートセンター集は、埼玉県の基幹型支援センターです。2016年度の厚労省「障害者の芸術活動支援モデル事業」からみぬま福祉会「工房集」内に開設し、2017年度からは国と県の助成を受けて県と連携しながら「障害者芸術文化活動普及支援事業」により運営しています。

埼玉では、障害のある人の表現活動を支援している県内の福祉施設等の職員たちが、活動主体となる「埼玉県障害者アートネットワーク TAMAP±〇（タマップ プラマイゼロ）」（通称タマップ）を立ち上げ、その活動に各事業を連動させる独自のスタイル（埼玉方式）で事業を進めています。表現する人、支援する人、それぞれの課題に向き合い、いろんな人たちとネットワークを育みながら活動に取り組んでいます。

事業内容

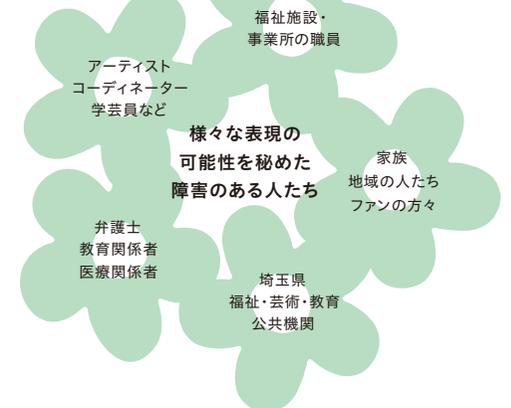
埼玉県内の障害のある人の
“表現”と“支援”を社会へ広げるための

- 相談支援
- ネットワークづくり
- 人材の育成
- 創造・発表・鑑賞などの機会創出
及び実施の協力・連携
- 情報の収集・発信 ●実態調査

【主な活動】埼玉県障害者アート企画展、織り&グッズ展、ダンスワークショップ、施設見学、グッズ研修、権利保護研修など

向き合い、語り合い、育み合い
“表現”を支え、広げる

埼玉県障害者
アートネットワーク
TAMAP±〇



工房集とは 一福祉の理念にもとづく表現活動の取り組み

どんな障害がある人でも受け入れる—— 重い障害を理由に学校卒業後の進路がない人たちのために、この理念を掲げて1984年にみぬま福祉会は発足しました。「困難や例外的な状況にある人を切り捨てない」ことを大切に40年経った現在では、埼玉県南部を中心とした通所・入所施設で、300名を超える仲間*たちが過ごしています。(2026年3月現在、相談支援を含め22の事業を運営)

仕事に人を合わせるのではなく、一人ひとりに合わせた仕事をする—— 労働は権利と考え、この言葉を実践する支援の現場で1994年頃、どの仕事にも合わない仲間の想いに寄り添い模索する中から「表現を仕事にする」取り組みが始まりました。その後、紆余曲折を経て多くの仲間たちの活動となり、その表現を社会につなげる活動拠点として2002年にアトリエ、ギャラリー、ショップ、カフェを備えた「工房集」を開設しました。

そこを利用する仲間だけの施設としてではなく、新しい社会・歴史的価値観をつくるために、いろんな人が集まっていこう。そんな外に開かれた場所にしていこう—— という想いが「集(しゅう)」という名前には込められています。現在は、11のアトリエを中心に約150名の仲間がそれぞれのペースで

表現を仕事として取り組み、それぞれの好きなこと、得意なこと、その人にしかできないことを模索する支援の延長から日々、一人ひとりの表現が生み出されています。

仲間たちの表現は、実に多彩です。その生き生きとした表現が「作品」となることで、本人と周囲の意識に大きな変化をもたらしてきました。既存の手法にとらわれない創作や、日常の行為から生み出される表現が、多くの人の心を捉えて、美術や障害の固定観念を覆し、新たな価値を社会にもたらしています。

工房集では、芸術分野の専門家たちの協力も得ながら展示会の開催、グッズや作品集の制作など、表現を社会につなぐ取り組みにも力を入れ、近年は、国内外の展示会への出展や企業とのコラボなどを通して、仲間たちの表現がアートとして高い評価を得る機会も増えています。

—— 障害の重い人の表現の可能性を模索し続け、その中から生まれた作品を通じて、多くの人とつながり、関わり、新たな可能性が生まれています。

※みぬま福祉会では施設利用者を「ともに働き・暮らし・地域をつくる仲間たち」との想いを込め「仲間」と呼んでいます。



KOBOSYU

埼玉独自の普及支援事業のあゆみ

2009

県内の“表現”の発掘・発信を開始

埼玉県では、「障害者の作品の芸術性・創造性を正当に評価する環境を整えることで、社会に新しい芸術観や価値観を創出できるのでは」といった提言のもと、行政(福祉部障害者福祉推進課)と県内の福祉、美術、教育等の関係者による実行委員会形式で2009年に「埼玉県障害者アートフェスティバル」を開始。ダンスや音楽の公演と共に「埼玉県障害者アート企画展」が始まりました。また、同年に県が「障害のある方の表現活動状況調査」を始め、その集めた調査票から企画展の出展作家を選ぶ独自の選考方法も生まれました。

2012

福祉施設職員が学び合う、展示会づくりがスタート

企画展では、障害のある人の表現活動を支援する人材の育成にも主眼を置き、2012年からは、県内の福祉施設職員等がアートディレクターのワークショップで学びながら企画・選考・設営・運営を行う開催に移行しました。

2016~

企画展のつながりを基盤に、支援センター&タマップを発足

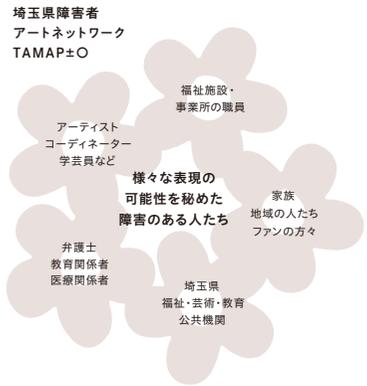
この一連の事業に携わってきたみぬま福祉会では、その経験とつながりを基盤に2016年、「埼玉県障害者芸術文化活動支援センター アートセンター集」を開設し、「埼玉県障害者アートネットワーク TAMAP±O」を発足。以後、企画展は県から主催を受け継ぎ、福祉施設職員をはじめ県の担当者や美術の専門家、弁護士など多様な視点を交えて選考する“みんなで作る展示会”として実施。その開催では、多くの障害のある人に自信や意欲を、また、支援者や地域の人々の意識に変化をもたらし、活動は深まりと広がりを見せています。

“みんなで作る”「埼玉方式」

この埼玉独自のネットワークを軸にした活動の継続により年々、障害のある人を中心にした支援の輪も広がり、地域の様々な連携が醸成されています。「埼玉方式」と名付け、県内外へ発信し続けています。

埼玉県障害者アートネットワーク タマップ プライマゼロ TAMAP±Oについて

TAMAP±O(以下、タマップ)では、県内の福祉施設職員たちが主体となって“みんなで作る展覧会”(企画展)をはじめ、障害のある人たちの“表現”について考え、その価値を広げる様々な活動に取り組んでいます。



タマップ 活動のポイント

語り合い、学び合うことを大切に活動しています。

毎月、定例会で情報も悩みも共有

ほぼ毎月、定例会を開き、活動の話し合いや振り返りをしています。対話の時間をつくり、支援の悩みなども語り合い、施設の催しなどの情報も交換。コロナ禍以降はオンライン開催が中心になっています。

県との連携を深め、地域活動を活性化

定例会には毎回、埼玉県福祉部障害者福祉推進課の担当職員も参加して、県が関わる展覧会やイベント、作品利活用の案件など、表現活動に関連する様々な情報を提供。参加団体の利用者や表現活動を地域につなぐ機会を増やし、地域との連携も活発になっています。



支部長を中心に、支援と活動を全県に普及

東西南北4つのエリアに分け、参加経験の長い団体が支部長を担当。エリアの個人で創作活動をしている人をフォローしたり、研修時にはファシリテーターとなり参加者の想いを引き出したり…。また、同県の特徴型支援センターART(s)さいほくとも連携して、表現活動とその支援の全県普及に努めています。

タマップ施設活動紹介

毎年度、タマップ参加団体の施設見学や活動紹介を通して、一人ひとりの表現を尊重する支援のあり方について、現場を見て学ぶ研修も行っています。実施団体にとっても、活動を見つめ直し発信する学びの機会になっています。

6/19 参加者 86名
@オンライン(ZOOM)

今年度は、オンラインで2団体が発表。光の家療育センターは、2名の創作活動を中心に、担当者が現場での関わりについて語りました。特色型支援センターのART(s)さいほくは、個人で活動する作家を取り上げ、家族へのインタビューを通して支援の課題を提起しました。

おが い やす あき なか ざき つよし 尾ヶ井保秋さん 中崎強さんの創作を通して /社会福祉法人 埼玉医療福祉会 光の家療育センター



右:尾ヶ井保秋さん
言葉の代わりにカラーチャートで絵の具の調合を指示。左手で筆を握り逆手で描いている

左:中崎強さん
車イスや道具をカスタマイズ。スポンジを入れた靴下に絵の具を付け、叩き付けるように描いている

ふくしまひさし 作家・福島尚さんの両親取材して /ART(s)さいほく(社会福祉法人 昴)



右:息子のアトリエを兼ねた部屋で語る父の清さん

左:地域の展覧会で担当者に作品を説明する福島尚さん

医療型施設として長年、重症心身障害者の療育と生活支援をする中で創作活動を実施。担当者は「気持ちを引き出す手伝い」を心掛け、それぞれの想いに寄り添いながら、試行錯誤を重ねて道具などを工夫しています。その支えのもと、2人の情熱あふれる作品が生まれ出されました。担当者の丁寧なコミュニケーションを見て、支援者は表現を代弁するための存在ではなく、表現が立ち上がる過程に伴走する役割を担っていること、また、表現が自己の尊厳を守る大切な手段であることに、参加者と改めて気づくことができました。

記憶の風景を鉄道写真のように細密に描き上げる福島さんは、埼玉県障害者アート企画展の常連作家です。近年は多くのメディアや展覧会でも取り上げられ、作品集も出版して活躍しています。両親へのインタビューは、その表現が幼少期からの体験や家族との関係と深く結びついていることを伝える内容でした。いかに見守り支えるかを自問し、本人と共に制作における迷いや葛藤を抱えてきた両親の姿から、表現を支えることは人生に向き合うことだと理解し、作家と家族を長期的に地域で支える仕組みの重要性や課題を共有することができました。

2025年度タマップ活動記録

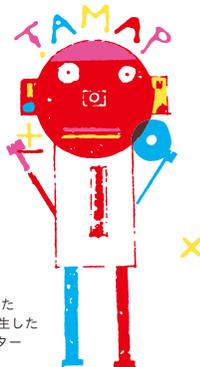
4/17	定例会:年間計画の確認	12/1	◇企画展設営
5/15	定例会◇企画展に向けての研修	12/2	◆埼玉県障害者アート企画展(～12/7) ◎オープニングセレモニー◇ギャラリートーク ◎アーティストトーク◎こぼるる鑑賞ツアー
6/19	定例会◇施設活動紹介	12/18	◆織り&グッズ展(～12/22) ◎ワークショップ&ライブパフォーマンス
7/1	◇ミニ選考会(～7/25)	12/18	定例会◇グッズ研修③
7/17	定例会◇グッズ研修①	1/22	◇権利保護研修
8/28	◇本選考会	2/19	定例会:企画展・グッズ展振り返り
9/12	◎ダンスワークショップ	2/26	◆音楽研修企画
9/18	定例会:企画展について	3/19	定例会:年間振り返り
10/2	◎ダンスワークショップ		
10/16	◇グッズ研修②		
11/20	定例会:企画展・グッズ展最終確認		

【参加団体】発足時11団体
埼玉県内の障害のある人を支援している福祉施設及び事業所

2025年度37団体



「埼玉をアップさせよう」「つながりをマッピングしよう」という想いと障害のあるメンバーの「埼玉は控えめだけど良いところもある、プライマゼロ」という発言を合わせてネーミング



メンバーから募集したイラストをもとに誕生したマスコットキャラクター「タマップくん」

企画展に向けて

「表現」と向き合い、みんなで探り、深め、広める。その一つひとつのステップで得た気づきを、日々の支援につなげています。

「支援のまなざし」を育む 研修会

企画展づくりの第一歩として、埼玉県障害者アート企画展の特徴やコンセプトを共有し、開催の意義を考える研修を行っています。新たな参加者の増加を受けて、今年度の第1部では、選考の指針となる視点や考え方を学ぶレクチャーを実施。第2部では、対話型の鑑賞ワークショップを行い、感じたことを言語化し、表現を捉える多様な視点を共有する機会をつくりました。



5/15 参加者45名
@埼玉県障害者交流センター

「アート企画展作品選考に向けての研修会」
アドバイザー：中津川浩章

中津川さんによる「障害のある人の芸術活動の意味と価値」の講話では、福祉的視点を交えて人間の根源に触れる表現を、社会に問い続けてきた企画展の意義を共有しました。参加者の感想には、完成度や技術だけでなく「作品の背景やプロセスを見る重要性を学んだ」との声があり、より丁寧に「作者の想いを伝えたい」「魅力を発信したい」という意識の高まりも見られました。また、創作が負の感情を呼び覚ますこともあると知り、表現活動での「配慮の重要性を再認識した」との声もありました。選考に関しては、評価するのではなく「何か気になる、背景を知りたい」といった“直感”が大切というメッセージに、「背中を押された」との感想が多く寄せられました。

様々な有名作家の作品を見ながら語り合うグループワークでは、異なる視点や印象から「見え方が変わった」「鑑賞が深まった」「発見が多かった」という感想が多く、対話や多様な視点を交えた選考プロセスの大切さを、体験を通して理解してもらうことができました。また、直感的な感覚を言語化することの「難しさや面白さを実感できた」との感想も多く、その学びも含め、ミニ選考会や表現活動でも「取り入れたい」との声もありました。その他「自分の思考のクセに気づいた」「人の意見を聞くこと自体が刺激的だった」「短時間でも深い対話ができた」という声もあり、それぞれに気づきを得ながら、交流も深めていました。



発言はグラフィックレコーディングで記録
制作：野際里枝

みんなで作る展示会のポイント

—“表現”をアートへ「埼玉県障害者アート企画展」プロセス—

“支援のまなざし”を育む—— 研修会

企画から設営までのプロセスでは、単に展示手法を学ぶのではなく、監修を務めるアートディレクター中津川浩章さんの協力を得て、企画展の意義を問いながら、一つひとつの表現と向き合い、語り合うことを大切に研修に取り組んでいます。

“これってアート?”も発掘する—— 調査票

障害のある人やその支援者に調査票を提出してもらったちで行っている県の「表現活動状況調査」では、作品かどうかかわからない表現にもアートの可能性があることを伝えて提出を求めています。それにより毎回、既成概念にとらわれない“アートの原石”から、アートとして高い評価を得ている作家の新作まで、多彩な表現が集まります。

福祉、美術…多様な視点を交える—— 選考会

出展作家を決める選考会では、集めた調査票すべてに選考委員全員が目を通して一次選考を行い、本選考会では美術、法律、教育などの専門家と共に話し合いながら選考しています。調査票のコメントから、表現がどのように生み出されたのか、その背景や作者の想いを知ること、また、専門家たちの見解を知ること、固定観念が崩れたり、表現の見え方が変わったり、対話が深まったり…。その選考での視点や、表現の魅力を作品展示に活かして、多彩な表現が一堂に会する埼玉県独自の展示会をつくり上げています。

人間にとってアートとは、
表現とは、障害とは…
問いかけてくるような
障害のある人たちの表現が
アートの可能性を広げ
社会に新たな価値をもたらしています。

“表現”と向き合い、みんなで探り、深め、広める。その一つひとつのステップで得た気づきを、日々の支援につなげています。

“支援のまなざし”を育む 展示会実践のステップ

日々の表現と向き合う

日常の行動や行為にも目を向け、
なぜこの表現なのかその想いを考える

「これってアート？」も発掘

表現が生まれた背景や作者のことも記載
表現活動状況調査の調査票を提出

企画展に向けて語り合う

障害のある人の表現の魅力とは、アートとは…
何のために何をどう発信するかを考え
コンセプトと意義を共有

多様な視点を交えて選考

みんながキュレーターの意識で
様々な観点から一人ひとりの表現の魅力を探り
出展作家を決定

タマツの連携力を活かして広報

タイトルやチラシなどコンセプトのイメージを共有
企画展の意義を広める

魅力をどう伝えるか考えて展示

コンセプトを踏まえて見せ方を工夫
「作品」として改めて見て語り合う

埼玉障害者アート企画展 たくさんの想いを交流させる

作家イベントや交流の機会をつくり
施設や家族での“みんなで鑑賞”も推進
運営も担い多くの感動と評価に触れる

みんなで振り返る

企画展を通しての作者や周囲の変化を語り合う
改めて意義を考える
気づきを日常と活動へつなぐ

埼玉県障害者アート企画展



県内の多彩な表現を発掘・発信し、その可能性と価値を社会に問い続けています。16回目の今年度は、130名の600点を超える作品を紹介しました。例年より開催を半日早め、初日にギャラリートークも行い、来場者数は前回より約500人増の過去最多を記録。アンケートには918名から感想が寄せられました。

12/2~7 出展作家130名
来場者2520名
@埼玉県立近代美術館 一般展示室1・2

第16回埼玉県障害者アート企画展
「Coming Art 2025」

監修:中津川浩章

主催:埼玉県障害者アートネットワークTAMAP±O、
社会福祉法人 みぬま福祉会
共催:埼玉県、埼玉県障害者アートフェスティバル実行委員会



「はたらくのりものしりーず」 齊藤淳太

各方面の協力により、年々来場者の年齢層や職業の幅が広がりリピーターも増え、今年度は「アートとしての深まりを感じる作品が増えた」といった声が多く聞かれました。アンケートには今回も、作品の個性や純粋さ、エネルギーを称える声とともに、「圧倒された」「想像以上のクオリティだった」などの驚きや、「元気が出た」「涙が出た」「温かい気持ちになった」などの感想が多く、「違う視点に気づかされた」「日常の表現が芸術になることに驚いた」といった気づきも多く見られました。また、「支援者の関わりの大切さを感じた」「社会や教育の場に活かせる取り組みだ」「もっと広まってほしい」といった事業への共感や期待のほか、作家へのエールも数多く寄せられ、回答は関係者や作家にもフィードバックしました。

今年度も参加団体の担当者の働きかけにより、施設利用者や職員の鑑賞機会が広がり、作者本人だけでなく周囲にも様々な変化がもたされています。活動の振り返りでは、「作家の誇らしげな表情が見られた」「遠方で来場できなかったが作品集を見て喜んで」といった感想に加え、「他の作品から刺激を受けて創作意欲が高まった」「従来と異なる作品をつくり出した」といった報告もありました。また、他の利用者や職員、家族にも関心が広がり、施設内での創作意欲の向上や関係性の深化、活動の共有、さらに自主企画への意欲につながるなど、多くの波及効果が見られています。



「Child within」ピクター・タン



右:「内視鏡から見た俺の腸」ほか 大串憲嗣



右上:「お多幸さん」ほか 古川舜一



手前:「無題」中川浩美

——非言語のコミュニケーションの中から生まれてくる「表現」の数々。これらは芸術なのか、たんなる表出なのか、あるいは無意味な行為の反復なのか。すべての作品には「生きる」というメッセージが刻印されている。なにが私たちの人生を社会をそして福祉現場を豊かにしていくのか。問いかけてくる展覧会です。

——監修:中津川浩章 本展チラシより



event 1
オープニングセレモニー 12/2

企画展では、作家が主体となる場づくりにも努めています。開幕式にも参加を呼びかけ、関係者挨拶や取材対応を依頼することもあります。今年度は、例年以上に大勢が集う中でテープカットを行いました。こうした取り組みの積み重ねで近年は、在廊して来場者や他の作家と交流する姿も多く見られるようになりました。事業の宣伝をしてくれる作家もあり、一人ひとりが会場に表現の魅力を広め、笑顔をもたらす欠かせない存在になっています。



event 2
ギャラリートーク 12/2

これまで展示作業終了後に行ってきた作品理解を深める取り組みを、来場者とも共有すべく企画した催しです。約1時間、約30名の作品について、作家を担当する福祉施設職員と監修の中津川さんが語りました。担当職員からは「説明をすることで作家への理解が深まった」。聴く側にいた職員からは「背景を知りより深く見られた」「制作の過程を知り学びになった」。来場者からも「人となり近づけた気がした」「作品はその人の一部だと感じた」といった感想がありました。また、「作家が主役になっていた」「それぞれの“らしさ”がにじみ出ていた」といった展示方法への評価も多く寄せられました。



左：もや師匠さん



右：中川浩美さん



右：石井健知さん



右：筋内裕樹さん

event 3
アーティストトーク 12/4、5 出展作家27名

来場者を前に作家自らが創作の想いを語る恒例イベントです。今年度は2日間に分け、27名が参加しました。家族や担当職員がフォローする場合もあり、担当職員からは「新たな一面が見えて驚いた」「本人を深く知ることができた」といった声が聞かれました。他の作家の話に耳を傾け、鑑賞する姿も多く見られました。また、作家の家族同士が声をかけ合う姿もあり、会話しやすい雰囲気ができ、来場者からスタッフに質問や感想を伝える場面も多く見られました。

参加者：古川舜一、尾崎翔悟、もや師匠、石井健知、なお丸、城所篤史、ばけ、竹内広明、入江テル、こうせい、出羽まいる、渡辺孝雄、今泉宏之、小笠原琉輝、高橋潤、Yoichi Nara、神谷羽菜、小幡海知生、関口直子、ユキウサギ、アイカ、時田鐘丸、杉田大河、金子隆夫、関翔平、及川礼、kkk



「光と陰」出羽まいる



「木になる不思議」
竹内広明

event 4
ことばでみる鑑賞ツアー
(埼玉県立近代美術館との連携プログラム)

昨年度同様、一般から参加者を募り、視覚に障害のある人は4名で、うち1名は福岡からの参加でした。鑑賞経験が豊富な3名は、ファシリテーターや美術館ボランティアに率先して質問を投げかけ、イメージを膨らませる対話をリードし、一作品ごとにじっくりと鑑賞を楽しんでいました。また、当初は緊張気味だった重複障害のある参加者は、少人数で丁寧に見て回らる中で、作品に興味を示す姿が見られました。後半は、2階の講堂で美術館所蔵のユニークなデザイン椅子の数々を触って鑑賞。その後、全員で感想を共有しました。

12/6 参加者12名

- 視覚に障害のある人4名
(ガイドヘルパー1名・福祉施設職員1名)
 - 美術館ボランティア3名 ○県職員1名
 - ファシリテーター4名
- 企画協力：con*tio、武居智子





【総評】みんなでつくる展覧会

監修：中津川浩章（美術家・アートディレクター）

16回目となる今回とくに強く感じたのは、展覧会をつくるタマップのメンバー個々の成長とチームとしての一体感です。40の福祉施設から集まったスタッフ一人ひとりが「自分ごと」として参加しアイデアを出し、なにかあればすぐに聞くのではなくまず自分のセンスでトライしてみる。そうして悩んだり迷ったりしたことが成果としてあらわれてくる。ほんとうに「みんなでつくる展覧会」になっていました。

最初の頃は展示作業ひとつとっても、逐一アドバイスしながらで大忙しでしたが、現在では安心して見ていることができます。これは展示のスキルが上がったということだけではありません。障害がある人たちの作品への理解の深まりと、その価値が見に来てくれた方々に、またその背後にある社会にどう響くのかということまで共有できるようになったからだと感じています。それまで美術とは無縁だった施設スタッフに「自分ごと」としてどう響かせるのか。対話型鑑賞の機会を持つことや、展示作品セレクトの際にも可能な限りダイアログを重ねてきたこと。これまでアートセンター集が進めてきた人を育てるための取り組みの数々が着実に実を結んでいます。

第3回から13年間、私はキュレーター、ワークショップファシリテーター、ディレクター、監修と役割や立場を変えながら関わってきました。今回は、これからの社会に向けて障害がある人たちの表現はその意味と価値をさらに深めていく、〈アート〉や〈人間〉の概念を拡張していくことになることを確信した展覧会でもありました。



「The Craft Bus Collection」もや師匠



出展作家の関翔平さん(左)と三宅史洋さん(右)



「すきなもの」新田新汰



権利保護研修

作者や作品を守るために著作権などの基礎知識を楽しく学ぶ、参加型の研修会です。企画展の選考にも携わる岩本弁護士が、毎回、現場に即した事例や最新情報を交えて、表現活動に関わる法律や契約の知識などをわかりやすく解説しています。今年度も参加者を広く募り、会場とオンラインの同時開催で実施しました。



1/22 参加者44名
@埼玉県障害者交流センター
及びオンライン(ZOOM)

「これって大丈夫？こんなときどうする？
障害のある人の表現活動
著作権に関するクイズで学ぶ法律知識」

講師：岩本憲武
(弁護士/岩本法律事務所)

前半の○×クイズでは、福祉施設での表現活動や商品化などを題材に、著作権と所有権の違いなどが解説されました。毎年受講している参加者でも迷う設問があり、「答えを考えることで理解が深まった」「法律は難しいと思っていたが楽しく学べた」といった感想が多く寄せられました。また、「作品の題名を施設側で決めていたことを見直したい」「利用者の作品を商品化する際の配慮を改めて考えたい」との声もあり、表現をより尊重する意識が芽生えたことがうかがえます。

後半では、実際の作品や事例をもとに解説が行われ、「イメージが湧きやすかった」「現場での対応に役立ちそう」との声が聞かれました。また、生成AIによる創作に関する解説には、「これからの時代に必要な視点が得られた」との感想も寄せられました。キャラクターや写真の模写などにおける著作権侵害の課題については具体的な質問もあり、その判断や対応についての解説でも、何が大切かを考える視点が示されました。

【講師より】障害者アートに関わる方々を対象に、今年も著作権等に関するセミナーを開催しました。会場とオンラインの両方で多くの方にご参加いただき、前半は10問のクイズ形式で楽しく知識を深めました。後半では、急速に普及した「生成AI」と障害者アートの関係や注意点をお話ししたり、著作権が問題となった実際の作品を見ながら支援のあり方について意見交換しました。法律や新しい技術も基本的なことを知っていれば、過剰に怖がる必要はありません。作者と作品を守りながら、今後も楽しく障害者アートを盛り上げていければと思います。まだ参加されたことのない方も、次回はぜひご参加ください。



配布した○×カードは仲間の手づくり

グッズ研修

12月の「織り&グッズ展」に向けた制作相談をもとに、商品化のプロセスを通して学び合う連続プログラムです。福祉施設のグッズ制作を支援しているcon*tio(コンティオ)の2人が、みんなで語り合いながら「何のための商品化か」を考えることを大切に、今年度は3回の研修を行いました。



7/17 参加者24名
@工房集
及びオンライン(ZOOM)

10/16 参加者26名
@埼玉県障害者交流センター

12/18 参加者21名
@工房集

講師：杉千種、山口里佳(con*tio)

研修には、グッズ制作をしていない団体も参加。アドバイスを得るだけでなく、施設利用者の作品の商品化や品質向上における悩みや課題を共有することが、担当者や制作活動の励みになり、近年は施設の強みを活かしたコラボ商品も生まれています。

グッズ制作は、支援のまなざしを育む活動の一つです。今年度は、「他の職員を巻き込み、現場にチームをつくろう！」といった呼びかけに続き、先進事例の紹介からスタートしました。そして第2回までは試作品を持参してもらい、「なぜこの素材を選んだのか」「どうデザインしたら作者の想いは伝わるか」といった問いかけとアドバイスを中心に、感想やアイデアを出し合い、改善策を探りました。

第3回は「織り&グッズ展」にて、改善した出展商品やパッケージ、ポップなどの良い点・改良点、展示・販売におけるディスプレイのポイントなどが解説されました。

【講師より】今年のグッズ研修会では、福祉施設職員の皆さんと直接商品を手に取りながら意見交換ができたことが大きな実りでした。「何のための、誰のための商品づくりか」という視点が少しずつ共有され、利用者さんへの想いやつくり手の人柄が伝わる商品が増えてきたと感じます。作家プロフィールをパッケージに載せるなど、想いを伝える工夫も見られました。グッズ開発は、支援を深めていく上でも大切な軸になり得る取り組みです。一方、様々な考え方がある施設の中で商品開発を進めていく困難さもあります。今後も、迷いや課題も含め「商品を通して誰に何を届けたいのか」に向き合う皆さんに伴走していきたいと思っています。

織り&グッズ展



表現の魅力を商品化して出会いにつなぐ展覧会です。タマップに参加する福祉施設が制作した商品をセレクトして展示・販売しています。

12/18～22 参加14団体+個人作家3名
@工房集ギャラリー

「ツグズムズ18 織り&グッズ展
～あなたにとどけ、そんな気分～」
キュレーション: con*tio



今年度は、織物や袋物で壁面を彩り、所々に北欧をイメージしたディスプレイを設けて、ぬくもりと賑わいを演出。恒例の作家イベントや限定カフェも盛況で、多くの笑顔と交流が生まれました。来場者からは「熱量を感じた」との声もあり、出展団体の「作者の魅力を伝えたい」との想いと試行錯誤が、年々全体のクオリティを押し上げ、成果が売上にも表れています。その反響に応え、季節商品や個人作家の商品のバリエーションも充実。今年度は、シールなどのシンプルな商品にも作者の個性が際立ち、文具や小物のコーナーでは、特徴を楽しく伝えるPOPやパッケージを読みながら選ぶ姿が多く見られました。

また、一点一点の表情を活かしたリズムミカルなディスプレイからの学びも大きく、タマップの振り返りでは「刺激になった」「出展を目標にしたい」との感想が多く上がりました。研修と展覧会の積み重ねにより「自分たちらしい商品づくりが見えてきた」といった声もあり、継続することの意義を改めて共有できました。



event

作家主体のワークショップ&ライブパフォーマンス

「ステンドグラスのオーナメント作り」

12/20 担当: 川口太陽の家 あおぞら班

作家たちの丁寧な指導を受けながら自由にガラスのパーツを組み合わせて創作。

「僕がひとつ、あなたのことを ぼやいてみせましょう」

12/21 担当: 川口太陽の家 金子隆夫

日々、名言をぼやいている金子さんが会話から似顔絵付きのメッセージを色紙に。

「たのしいお人形作りのワークショップ」

12/21 講師: 関口直子

人形作家の関口さんが用意してくれたパーツをもとに自分好みのお人形を創作。

「革小物づくりのワークショップ」

12/20 担当: やどかりの里 すてあーず

手ほどきを受けながら革に模様や色をほどこしダーナホースのオーナメントを制作。



ダンスワークショップ

身体表現の可能性を探り、その魅力を発信するために、県内で長年インクルーシブなダンス活動を率いている竹中幸子さんと、そのスタッフやプロダンサーの協力により、2017年から継続しています。参加者を募り、今年度は2回開催しました。



9/12 参加者59名
10/2 参加者55名
@埼玉県障害者交流センター

講師・ファシリテーター
竹中幸子(ベストプレイス主宰)

掛け声や音楽に合わせて全身を動かし、みんなで手を取り身体を寄せ合い、動きを楽しむワークショップです。その約2時間の中で、一人ひとりの表現や気持ちが引き出され、また、立場を超えた新たな関係性も育まれています。今回も、参加者同士の交流を含め「楽しかった」との声が多く、支援者からも「広い空間と多くの参加者に刺激を受けていた」「いつもと違う表情が見られた」「主体的な姿が見られた」といった声が多く聞かれました。視覚に障害のある参加者も含め、ダンスによる多様なコミュニケーションが、継続して取り組む意欲や自信につながっているようです。参加者が増える中、常連メンバーが場を盛り上げ、運営側を助ける様子も見られました。

【講師より】 タマップのダンスワークショップのファシリテーターを今年も引き受けて、交流センターに向かうバスに乗り込む。今日初めて会う方たちを想像し、いつも参加してくれる常連の方々の顔を思い浮かべながら心を占めるのは、実は、初めての年から9年間変わらない不安と緊張感。しかし、この不安が杞憂に終わることはわかっている。毎回、小さくてリアルな美しさに出会えた満足感に浸って帰途につく。アシスタントのダンサーたちもこの場で踊ることを楽しみにしているし、成長の機会をもらっている。このワークでは、スタッフの方々も含め、そこにいる全員が、今、起きていることを共有しているという実感がある。参加者の皆さんが、なんのてらいもなく自分に集中し、お互いを感じ合って動くことを楽しむ…そこで生まれた美しさをその場にいる皆が認め合う、というこの活動がこれからも続くことを祈っている。これほどの表現者たちが表現難民にならないことを願いつつ。



音楽研修企画

昨年度の音楽研修の経験を踏まえ、今年度も特色型支援センターART(s)さいほくと協働で音楽イベントを開催しました。

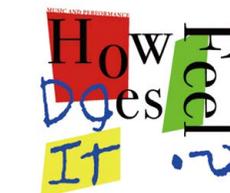


サヤカロックハン

2/26 観客約81名
@埼玉県障害者交流センター

出演者 6団体
エンジェル・ハーツ
太田将誉(おた・まさたか)
カナザワカズマ
サヤカロックハン
調律人形(チューニング・ドールズ)
Demolitions
(from YOYKO, Rockstar★, SideWinDer)

主催:ART(s)さいほく、アートセンター集
共催:埼玉県
南関東・甲信障害者アートサポートセンター
東海・北陸ブロック障害者芸術文化活動
広域支援センター
制作協力:HEAD MUSIC 合同会社



「How Does It Feel?(ハウ・ダズ・イット・フィール?)」
イベントタイトルの意味は「どんな気分?」



トークセッションの様子



エンジェル・ハーツ



太田将誉



調律人形



カナザワカズマ



Demolitions

相談窓口

アートセンター集の相談窓口では、障害のある人やその家族、支援者の「創る」「深める」「広げる」「守る」をサポートしています。

障害のある人や家族、支援者からの「作品を発表したい」「アート活動を始めたい」といった芸術文化活動に関する相談のほか、障害のある人の作品を「活用したい」「展示したい」「学びたい」といった地域の方々や企業などからの相談にも県内の福祉、アート、教育、行政、司法などの専門家・機関と連携して対応しています。

相談対応事例

権利保護に関する相談

作家が亡くなった後の作品管理に関する相談が数件ありました。また、作品の2次利用に関するもの、企業との契約書についての具体的な相談もあり、弁護士から助言を得て対応するケースが増えています。

ネットワークの取り組みに関する報告依頼

「タマップのネットワークによる取り組みについて報告してほしい」という依頼が、他県の支援センターや文化団体などから多数ありました。実行委員会形式の展示会は各地にあります。官民や施設が連携して継続・拡大している取り組みは珍しく、ネットワークの広がりや深まりを県内外へ伝えています。

2/1千葉県「うみのもりの玉手箱5」展関連イベント「つくる・つたえる・つながるサミット vol.2」での報告の様子



創作活動の現場への見学依頼

昨年茨城県で開催した展示会の影響を受けて、同県の福祉事業所から多くの見学依頼があり対応しました。作品が生まれる現場を見学し、「自施設でも活動を深めていきたい」との感想をいただいています。

相談実績 (2025年4月～2026年2月)

総数 309件 998回

件数は新規の相談数、回数は相談対応回数です。

相談者	件数	回数
障害当事者	23件	116回
家族	10件	23回
障害福祉関係者	114件	365回
文化施設	9件	30回
芸術家・文化団体・文化関係者	28件	75回
市民団体	1件	3回
教育関係者	20件	67回
医療機関	2件	6回
自治体	32件	100回
企業	46件	140回
報道機関	4件	18回
その他	20件	55回

分類	件数	回数
美術	235件	768回
音楽	15件	57回
演劇	9件	25回
舞踊	2件	5回
その他	2件	7回
分類できないもの	46件	136回

相談内容	件数	回数
鑑賞	7件	20回
創造	29件	105回
発表	56件	186回
交流・連携	13件	38回
調査研究・保存	3件	12回
権利保護	50件	169回
人材育成	8件	22回
情報発信	66件	203回
その他	15件	69回
見学依頼	62件	174回

情報発信

アートセンター集では、障害者アートや表現活動に関する情報の収集・発信も行っています。

SNS等では、タマップ参加団体の催しや各地の公募展など、関連情報も発信しています。企画展の際には、来場した作家や会場の様子も投稿。広報にあたっては、参加団体や関係機関にも協力を仰ぎ、多くの反響が寄せられ、活動や作家たちの大きな励みになっています。

展示会チラシ

埼玉県障害者アート企画展



動画制作

県のオンライン美術館用に作家の創作を記録。また、フェス(P27)上映用に活動の広報映像も制作。



メディア掲載

- 埼玉県障害者アート企画展
12/3 浦和経済新聞 12/5 毎日新聞
12/4 埼玉新聞 12/6 読売新聞
- こたばでみる鑑賞ツアー
12/28 埼玉新聞

- ◇埼玉県広報紙
「彩の国だより」
12月号

- ◇県政広報テレビ番組
「いまドキッ!埼玉」11/29放送

←見逃し配信(YouTube)19分頃～



織り&グッズ展



ホームページ・SNS

アートセンター集 公式サイト



タマップ Instagram



地域での連携事業

アートセンター集では、地域の様々な団体や機関と連携して表現活動の輪を広げています。

topics

作品制作
展示・出演
利活用

「VIVA LA ROCK 2025」とコラボ!

5/3~6 @けやきひろば

埼玉県×ビバラによる「You'll Never Live Alone プロジェクト」の一環で、ライブでの感動を表現した10名の作品が場内に展示され、障害のあるメンバーも参加するColorsとTHE GROOVIN'Sが野外で演奏を披露。さらに、屋外を彩る巨大フラッグには6名の絵画が採用され、ライブ会場では当センター制作の広報映像も上映! 延べ10万5千人を動員した県内最大のフェスを、タマップが誇る“表現”が盛り上げました。



オンライン美術館で
作品と作家メッセージを公開中!



作品展示

「第73回県展」に合わせ作品展開催

5/28~6/19 @埼玉県立近代美術館

県の障害者福祉推進課が主催となり、当センター等が協力して、県内最大の公募展「埼玉県美術展覧会」の会期中、同会場の上階に12名の57作品を展示しました。



作品展示

「楽描き(らくがき)」展に

31名が出展

5/10~18 @さいたま市 プラザノース

漫画家のあらい太郎さん、現代美術作家の梅沢和木さん、障害のある作家たちとの合同作品展。タマップの5団体からは31名が作品を出展。プロのアーティストとの交流も楽しみました。



見学
作品制作
複製展示

「大宮競輪Heartfulアート2025

(障害者アート×大宮競輪場)」に参加

@大宮競輪場

競輪場を見学して制作する作品公募企画に、タマップの参加団体が参加。最優秀賞には社会福祉法人彩凜会の藤さんが、優秀賞には5名が選ばれ、作品パネルが施設内に展示されています。



作品展示

「はみ出す力展vol.7」に作品提供

1/21~25 @八戸市美術館

武蔵野線沿線美術教育実践学習会「び会」が主催する“授業の展覧会”で、当センターへの相談を機に始まった上尾市立原市立中学校の鑑賞の取り組みが取り上げられ、関連する作品を数点、提供しました。



作品展示

「メディアセブン

障害者アート展」に協力

9/4~30 @川口市立映像・情報メディアセンター
メディアセブン

県の障害者アート魅力発信事業の一環で、7団体と作家2名が25作品を出展。作品には取材した大学生による作品解説も添えられました。



複製展示

アートパネルに作品提供

@埼玉県障害者交流センター

2025年3月に大野麗果さん、恩田貴弘さん、柴崎優翔さん、山崎利之さんの作品が追加され、計6名の複製パネルが展示されています。



作品展示

物販

「彩の国セルブまつり」に参加

6/1 @鐘塚公園

埼玉県セルブセンター協議会主催の福祉施設が集うイベント。第26回の今年度もタマップで作品展示とグッズ販売をしました。



埼玉県障害者芸術文化情報

埼玉県では、障害者の芸術文化活動の「芸術性」や「創造性」にスポットライトを当て、その魅力を通じて、多様であることを認め合う豊かな共生社会の実現を目指しています。

2009年から続く「埼玉県障害者アートフェスティバル実行委員会」を中心に様々な参加イベントや普及事業を行っています。※下線は「障害者芸術文化活動普及支援事業」に関する取り組み

2025年度 主な事業

◇埼玉県障害者アートフェスティバル実行委員会事業 ◇同会共催・協力 ○県補助事業

芸術性・創造性あふれる障害者アートの魅力発信

- 【美術】 ◇埼玉県障害者アート企画展 ◇埼玉県障害者アートオンライン美術館
◇障害者アート魅力発信事業(①障害者アートの常設展示 ②障害者アートの利活用推進)
- 【舞台芸術】 ◇バリアフリーコンサート ◇障害者ダンスチーム「ハンドルズ」公演
- 【共通】 ◇各種イベントにて障害者アートを展示 ※実施記録は下記に掲載

障害者の芸術文化活動の裾野拡大

- 【美術】 ◇障害者絵画展(希望者全員の作品を展示する公募展)
- 【芸術文化体験】 ワークショップ(◇打楽器 ◇スティールパン ◇書道 ◇レザークラフト)
- 【市町村事業の実施促進】 ◇市町村ワークショップの開催支援
- 【芸術文化活動普及支援事業など】 ○障害者芸術文化活動支援センター ◇表現活動状況調査

2025 topics

11/22 @蓮田市総合文化会館ハストピアギャラリー

「障害者絵画展」

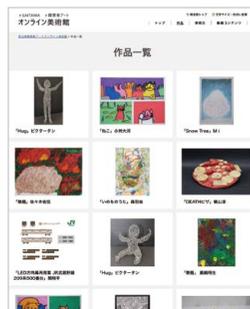
毎年、障害者週間の記念事業として会場を変えながら開催している公募展です。今年度はご応募いただいた185名の作品を1点ずつ展示。大変多くの方にご来場いただきました。



埼玉県障害者アートオンライン美術館

#SAITAMA #障害者アート オンライン美術館

毎月1~2作品をレビューとともに追加(現在130点以上)。創作風景の動画や中津川浩章さんの寄稿文も追加しました。



障害者アートの利活用推進 デザインやリースに！作家と企業、団体とをマッチング

埼玉県では、魅力的な障害者アートの利活用を推進する取り組みとして、タマップ参加団体とも連携し、企業や団体に作品や作家の紹介を行っています。

利活用のポイント

- 心に残る独創的なデザインになる
- 個性あふれる作品がお客様との話題になる
- CSRやSDGsの取り組みにつながる …など

活用例

- デザイン利活用:うちわなどのノベルティグッズ、広報誌の表紙、イベントのフラッグなど
- 作品リース:ロビーや応接室、カフェなどに展示

【事例】広報誌の表紙

社会福祉法人 埼玉県社会福祉協議会
広報誌「S・A・I」2025年8月号表紙
作品「ひまわり〜母へ」尾ヶ井保秋



【事例】原画の購入

スミダ工業株式会社
さいたま市の本社内に常設展示
作品「てんでん」野口敏久



ホームページでは、企業や団体の活用事例を紹介しています。リースやデザイン利用が可能な作品一覧(サイズや作家紹介文も掲載)もダウンロードできます。みなさまぜひ、ご活用ください。



お問い合わせ | 福祉部障害者福祉推進課 社会参加推進・芸術文化担当 | 電話048-830-3312

message

埼玉県福祉部障害者福祉推進課 主幹 金子美樹子

ご縁があって障害のあるアーティストの皆さんと出会い、心から湧き出るような作品に触れ、日々元気をいただいています。交流を重ねる中で、表現することが大切なコミュニケーションツールの一つになっていることを強く感じています。そして、表現活動には、絵画や立体作品の創作だけでなく、ダンス、音楽、演劇など様々なジャンルがあり、ワークショップや研修会などを通じて幅広く芸術に触れる機会も提供していただいています。

今年度は、埼玉県障害者芸術文化活動普及支援事業の取組も10年目の節目を迎えました。2016年の11団体からはじまり、現在では37団体へとネットワークが広がり、全国的にも注目を集めています。これもひとえに、社会福祉法人みぬま福祉会をはじめ、TAMAP±〇に参加する福祉施設の皆さんが、互いにリスペクトし合いながら展示会や研修会、ワークショップなど様々な活動に取り組み、埼玉県全体をレベルアップしてきた成果だと考えています。

県としても、障害者アートの魅力発信と裾野拡大、企業などへの利活用の働きかけに取り組んでいます。今年度は、埼玉県障害者芸術文化活動支援センターがある工房集を大野知事が訪問し、アーティストや職員の方々と交流しました。また、広報紙「彩の国だより」12月号でも特集記事として、障害者アートの取組や作品を紹介しました。

今後も、作品の魅力発信や企業等への利活用の働きかけなどを積極的に進め、障害のある方もない方も共に生きる共生社会の実現を目指してまいります。



知事視察「ふれあい訪問」の様子

「令和7年度埼玉県障害者芸術文化活動普及支援事業」報告書

art center syu 2025 report

みんなでつくる 埼玉方式

2026年3月28日発行

企画・発行：社会福祉法人 みぬま福祉会

埼玉県障害者芸術文化活動支援センター アートセンター集

〒333-0831 埼玉県川口市木曾呂1445(工房集内)

TEL 048-290-7355

構成・編集：武居智子、アートセンター集

制作協力：埼玉県障害者アートネットワーク TAMAP±〇、アートセンター集協力委員

アートディレクション：藤沼重人(Type-f design room)

写真撮影：鈴木広一郎、武居智子、長崎剛志、工房集

グラフィックレコーディング[研修]：野際里枝

デザイン[題字・ロゴ・タマップくん・企画展ロゴ]：水川史生(en design studio)

原画制作[題字・タマップくん]：尾崎翔悟(工房集)

©社会福祉法人みぬま福祉会・埼玉県

※無断転載厳禁



✿
art center syu ✿

<https://artcenter-syu.com>

